

J・S・ミルは道徳的言明を何だと考えていたのか  
—ムーア以降の解釈と「自然主義的誤謬」の再検討—

岡本慎平(広島大学大学院文学研究科)

1903年、この年G・E・ムーアはその後の哲学の動向を決定づけた著作、『倫理学原理』を公刊した。そしてこの記念碑的著作において彼は、J・S・ミルに対して、定義不可能な「善」を快樂という「自然的対象」によって定義していると批判し、ミルの快樂主義に「自然主義的誤謬」の烙印を押した。これによりミルは哲学的倫理学の表舞台から退場し、このことを以って、哲学上の新分野として「メタ倫理学」が誕生した……このような説明は、二十世紀の哲学の歴史を振り返るにあたって、今なおありふれたものだろう。

しかしその後のメタ倫理学の発展の中で、ムーアはミルの主張の要点を見誤っていたのだとする反論がいくつも提起されている。例えばアラン・ライアンは次のような診断を下した。ミルは『倫理学体系』等において、直接法によって事実についての真偽の判断を下す「科学」と、命令法やその婉曲表現によって規則や指令を勧告する「技芸」という二種類の言明を区別し、倫理学が扱う言明は後者であると論じている。また彼は『功利主義論』において、「究極目的についての問題は直接的な証明になじむようなものではない」と明言している。こうした根拠により、ミルがおこなった—そしてムーアが非難した—究極目的の「証明」は技芸の問題であり、善を定義しているのではなく、「幸福を求めよ」という指令を下している。それゆえミルは、少なくともムーアによって論難されたような、善の自然的対象への還元的定義という誤謬を犯してはいないのだと。

こうした解釈にしたがって、現在でも少なからぬ研究者が、ミルは道徳的言明を事実についての表明(assertion)ではなく命令や説得に類するものとして捉えていたと理解し、彼の立場を指令主義(フマートン)や反実在論(ウェスト)等の非認知主義的メタ倫理学説に同定している。だが、マクロードらによって、こうした解釈に以下のような難点が含まれることも指摘されている。第一に、ミルを非認知主義者とみなすにはテキスト上の証拠が極めて不足しており、彼自身は非認知主義的見解の正当化を試みてすらいない。この解釈は事実上、ミルの諸著作に散在する非認知主義的要素を繋ぎあわせたものにすぎず、二十世紀の哲学を十九世紀の哲学者に押し付ける時代錯誤という誹りを免れ得ない。第二に、この解釈に従えば、『功利主義論』におけるミルの証明は「直接的な証明」ではないどころか、いかなる意味においても「証明」ではなくなってしまう。しかし、ミルは「証明」を単なる説得ではなく、論証によって読者に動機付けへの反省をうながす合理的根拠として捉えており、彼は究極目的の広い意味での証明が「理性的能力が認識できる範囲内」の問題であることも認めている。なにより彼は、究極目的の「証拠(evidence)」を挙げようと試みている。ライアンらの解釈では、「証明」に込められたミルの意図が決定的に失われてしまう。

ムーアの批判と非認知主義解釈の難点の双方を回避するため、本発表では究極目的の証明自体ではなく、ミルの道徳的言明の構想に着目する。ミルにとって、行為の帰結として生じる幸福の多寡と道徳的評価の是非は必ずしも一致するものではなく、また彼は複数の評価語の中で正・不正の判断のみに動機付けの内在を認めている。こうした「道徳」と究極目的である幸福との差異を考慮した上で、ミル自身の論述といっそう整合的な彼のメタ倫理学説の再構成を試みる。